

周産期喪失を経験した母親と家族へのグリーフケア ～継続支援の基盤構築～

看護学部 遠藤 佑子



キーワード

グリーフケア、周産期喪失、ペリネイタルロス、流産、死産、継続支援、メンタルヘルス

研究概要

医療従事者は、医療技術の進歩によりこれまで救えなかった生命が救えるようになり、生命を救うことに強い使命感を抱きながら臨床現場で全力を尽くしている。しかし、どんなに高度医療技術が備わった現代でも、「人間の力ではどうすることもできない死」を目の当たりにした時、医療者の多くは根底にある「死＝敗北」という思考から、敗北感や無力感を強く抱く傾向がある。そして、死を目の前にした医療者は、もうこれ以上できることは何もないと考え、助けられなかったことへの罪悪感にただ苦しむ者も多い。そんな時こそ、「仕方ない」・「忘れよう」とするのではなく、死から目を背けず残されたご遺族と共に悲しみ、医療職者である前に一人の人間として心で寄り添えるような関わりが求められる。大人も子どもも、そして小さな赤ちゃんも、紛れもないかけがえのない生命である。妊娠週数に関係なく、小さいのちも平等に大切に扱う尊厳あるグリーフケアが必要である。産後であるにも関わらず、流産・死産等を経験した女性は、産後ケアも地域における継続支援もほとんど提供されていない状況が続いた。悲しみとともに生きる当事者が医療施設および各地の自治体より必要が提供されるよう継続支援の基盤構築が求められている。

アピールポイント

令和3年5月31日 厚生労働省子ども家族局母子保健課長より、全国の自治体母子保健主管部へ「流産や死産を経験した女性等への心理社会的支援等について」の通達が発出された。いのちの尊厳を守り、本来あるべき支援をすべての母児に届けることが命じられたばかりである。周産期喪失を経験した母親と家族のメンタルヘルスを守るため、必ず関わる医療施設および行政職員の人材養成や支援体制整備が急がれている。

応用分野

机上の空論ではなく、任意団体周産期グリーフケアはちどりプロジェクトの活動を通じて、当事者の声に耳を傾けながら、当事者が望む支援を形にしていくことを大切にしています。周産期に限らずあらゆる喪失への寄り添い支援の普及を目指し、悲嘆によって誰一人として孤立させない社会を目指したいと考えています。当事者と医療者が対等に協働する形で、当事者・医療・行政の確かな連携を目指しています。